

審査結果の要旨

論文提出者氏名 宇野良子

宇野良子氏の博士論文Detecting and Sharing Perspectives Using Causals: A Case of Japanese Causals（視点の追跡と共有 ― 接続助詞「から」を含む複文の認知言語学的分析）は日本語における理由の表現、とりわけ接続助詞「から」によって表される関係に注目し、そこに潜む認知プロセスのダイナミズムを解明したものである。とりわけ、因果関係の把握において外在的理解と話者の主観的視点に依拠した理解の相違を実証的に論じた功績は大である。論文は全6章から構成されている。

第1章では、日本語における接続構造を外在的な関係を表すものと話者の主観に依拠したものとに分けた上で、「から」が両方の捉え方を表しうる形式であることを示し、同時に永野、南、田窪ら日本語学者による先行研究のサーヴェイを行っている。第2章-第3章では、メンタル・スペース理論を応用して視点構造を捉え、スペース配置の相違として二種類の「から」構文を分析している。ここではSweetserによって描き出された、実質的読みと認知的読みの類型をさらに精緻化し、中間例の存在を指摘している。同時に、認知プロセスの相違に対応する統語的特徴も、田窪らの研究を発展させ、**Role and Reference Grammar (RRG)**の枠組みをも参照しつつ明らかにしている。第4章-第5章では、これまでの分析で問題となる例について、静的理由文と動的理由文という区分を新たに導入し、モデルを提供している。そこでは言語使用者の志向性に注目し、因果性の把握についての関与のありようを分析している。第6章は、結論にあてられている。

本論文の学術的意義については、以下の審査結果が得られた。

1. 日常言語において因果性を表す形式は多様であるが、その背後にある因果性の認知プロセスもまた、一様ではない。Sweetserは「実質的」、「認知的」、「発話行為的」という三領域を立てて因果性の捉え方の相違を分析した。いっぽう、日本語学の伝統においても、「ノデ・カラ論争」という形で、因果性を表す形式がもつ機能についての分析が以前からなされてきた。本研究はこれらの先行研究をふまえた上で、メンタル・スペース理論を応用して、より妥当性の高い分析を行うことに成功した。Sweetserによる領域間の関係の分析は、メタファー写像による不連続な結びつきという観点に立っているが、本研究では実質的領域と認知的領域の類似性および相違をより一般的な観点からとらえている。外在的理解と話者の主観的視点に依拠した理解という区別は、スペース配置の相違として捉えられている。後者においては、因果性を把握する媒介として話者が存在する。因果性の標識と

してのカラの特殊性は、この両方のスペース配置を許容する点にある。この点は、「ノデ・カラ論争」にも新たな洞察を提供するものである。

2. 上記の主張を行うにあたり、本研究は複文におけるテンス・モダリティの解釈の分析に基づいた論証を行った。類型論的妥当性をめざす文法理論の中では、形式と意味との相関が言語の一般的特性とされる。特に複文の分析では、Interclausal Semantic Hierarchyが接続の構造上のタイプ（接続レベルと依存関係というパラメータによって規定される）と相関するという仮説が出されている。本論文では、南や田窪の先行研究によって指摘された点をさらに深め、カラによる接続構造における相対テンスの解釈、および認識的モダリティの分布にもとづいて、一見同じに思われるカラ接続が、実は解釈に対応して異なる構造をもっていることを示した。この点は日本語の具体的分析として有意義であるばかりでなく、機能的類型論のテーゼを支持する論拠が新たに提示されたという点でも重要である。

以上二点については、審査員の間でも強い支持が得られた。

3. 本論文の後半部分を占める、因果性の把握における静的（static）対動的（dynamic）読みの存在は、これまで指摘のほとんどなされていなかった現象であり、この点についても高い評価が与えられた。ただし、実質的読みと認識的読みの連続性、および静的なカラ文の存在は、デリケートな判断を要する部分があり、より明示的な論証が求められるという指摘もなされた。とはいえ、静的なカラ文においてはメトニミー的な判断や、場合によってはアド・ホックな連想関係にもとづく因果性の把握が主であり、その点で世界の構造よりも話者の認識状態に依拠した因果性を含む度合いが強いという指摘は、大いに魅力的な議論であった。こうした現象を分析するために提案された、話者の志向性という概念、およびそうした志向性に対話の相手が同調し、話し手が構築したメンタル・スペースの配置を聞き手がトレースすることで静的な因果性が理解される、という提案は既存の言語理論の枠を越えた意義をもつ。この点については、ヒトの進化研究や自閉症研究などと連携した学際的な研究の必要性が審査員により指摘された。

最後に、本論文は「一人称的観点からの文法理論」の構想を示している。これは言語使用において話者の主観性が根源的に関わっている、というアポリアに基づいて言語理論を再構築しようとする発想であり、今後の発展が期待される。

以上、本論文は因果関係の把握の言語化という認知意味論における重要課題に日本語を軸にすえて取り組み、従来なされなかった貴重な観察、分析、理論化を提示したものである。全体として学術的価値が高く、この分野における優れた研究成果として高く評価すべきものと判定する。よって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。